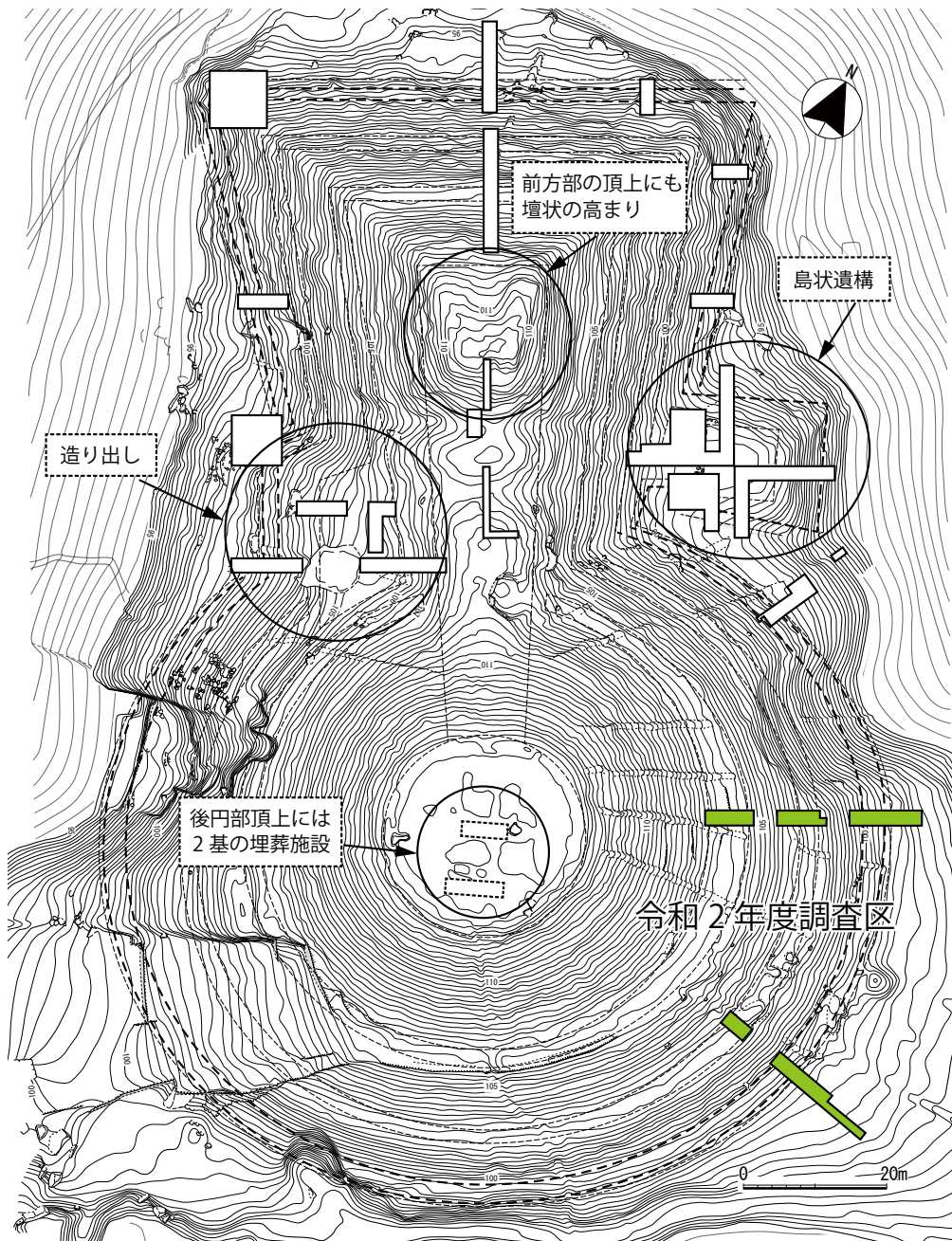


かな くら やま こ ふん
金蔵山古墳

範囲確認調査（第7次）現場公開資料

古墳の概要

金蔵山古墳は操山丘陵のほぼ中央、標高100mほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長約158mといわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳が築かれる前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品があり、昭和28年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われ、2基の竪穴式石槨やそれらの上部に方形埴輪列をともなう区画がみつかっており、多種多様な副葬品や埴輪類が出土しています。現在、古墳全体が山林となっていますが、岡山を代表する古墳のひとつであり、墳丘の外表施設や埋葬施設などの遺構、副葬品や埴輪類などの遺物は学術的・学史的に非常に重要で価値が高く、保護や活用を図っていくことが課題となっています。



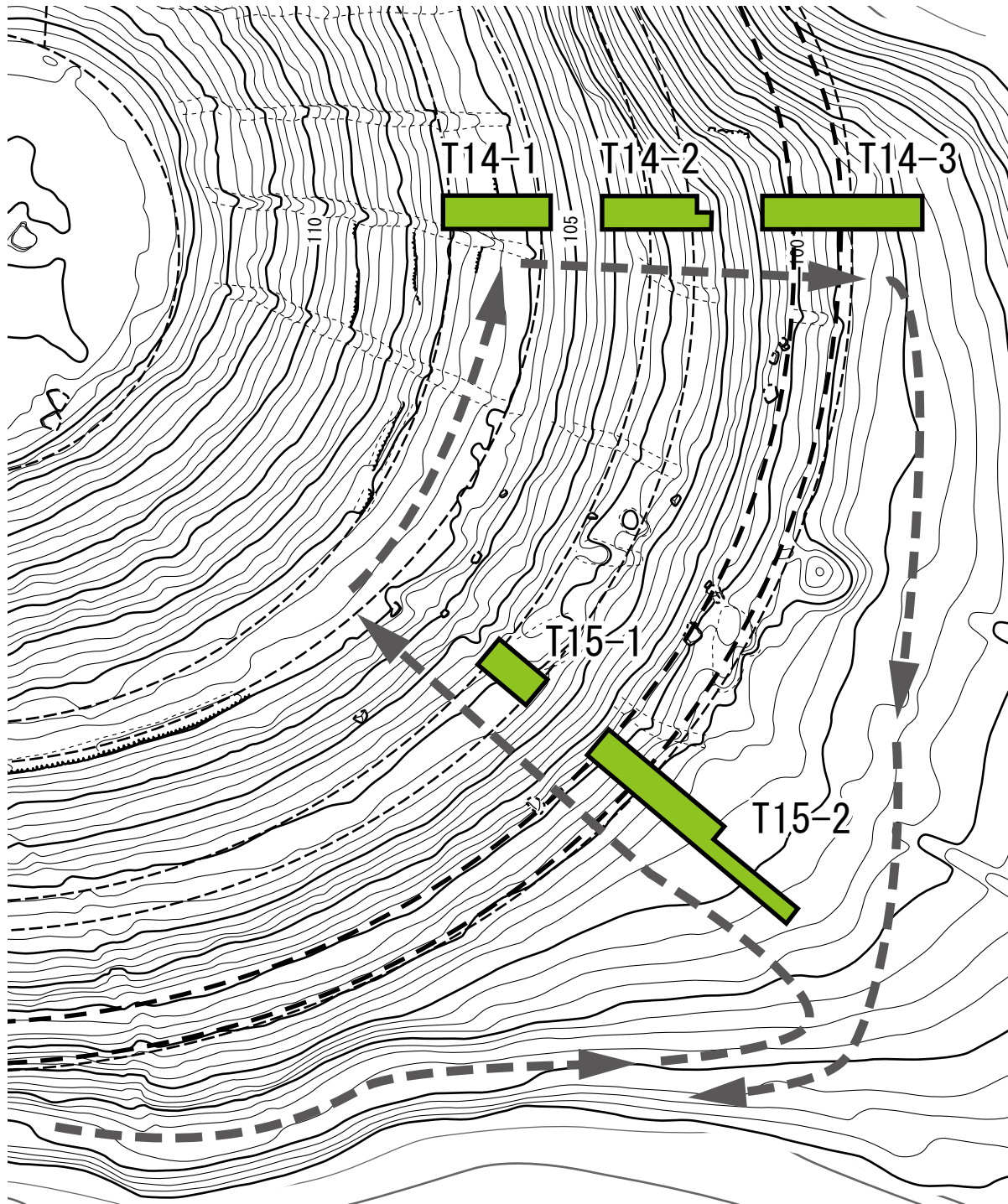
金蔵山古墳の概要と調査区の位置

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では金蔵山古墳の墳丘の規模、形態、構造等を追求し、将来は史跡等の保護の措置を図っていく計画で範囲確認調査を実施しています。これまでの調査では、前方部の西側に造り出し、東側に島状遺構が付属することや、くびれ部から前方部にかけての墳端や墳頂の状況の詳細が判明しました。あわせて、出土した埴輪は量や内容ともに充実したものとなっています。

令和2年度調査成果

第7次となる今年度は後円部側への調査に移行しました。古墳は三段に築かれており、古墳の端にあたる部分や上下2つある平坦面に調査区を設定しています。



調査区の配置と見学ルートのご案内

トレンチ 15-2 第1段斜面の葺石の残りは悪い状況です。開墾の影響でしょうか。金蔵山古墳の墳端部分は、手の込んだつくり方をしていることがこれまでの調査で明らかになっています。第1段斜面にとりつく形で、高さおよそ1m程の段が確認できます。詳細に関しては、段には埴輪列が存在し、外側に列石状の葺石がともなう特徴があります。他に、このような構造をもつ古墳の例はなかなかみられません。調査区内では、段の列石の他、本来埴輪列が樹立していたと考えられる場所の周辺で礫敷きを検出しました。さらに、トレンチ 15-2 では後円部の東側に広がる平坦地に、未知の遺構が存在している可能性が残されておりましたので、調査区を長めに設定しています。結果的に、掘り上がりを見ると造り出しなどの付属施設を想定することは難しいです。古墳を築く際に、資材置き場などある程度の空間を確保しておく意図があったのでしょうか。

トレンチ 15-1 第1段平坦面を調査しており、埴輪列が検出されています。円筒埴輪の底の部分が残されているものとみられ、上部は失われています。金蔵山古墳の平坦面をめぐる円筒埴輪は突帯が3条の4段構成、高さ約50cm、径は30cm前後と規格性をもち、それらが間隔をあけず密に樹立していたと推定されます。また平坦面には円礫を混ぜた礫の堆積がありますが、青みがかった丸い石は山下の平野部から持ち込まれたものです。古墳の平坦な部分ではよくみられる構造であり、土の露出を隠すような装飾的な意味があったと考えられます。

トレンチ 14-1 トレンチ 14 は、古墳の主軸に直交する形で後円部の上下2つの平坦面、古墳の端の部分、あわせて3箇所を調査しています。トレンチ 14-1 は墳頂に近いこともあって第3段斜面の葺石は立派なものです。斜面の根本に存在する葺石の基底石は大きさが40～50cmの花崗岩を使用します。大きな石材が横一列、その上に小ぶりの石、そしてまた大きめの石材が並んでおり、横方向を意識した配置の仕方が観察できます。葺石の外側には円礫が混ざった礫の分布があり、平坦面を飾っています。さらに外側に大きな石が顔をのぞかせている部分もありますが、こちらは花崗岩の岩盤です。もとの山を整形し、盛土により古墳を築いた跡がうかがえます。埴輪は2個体分がかろうじて原位置を保っています。さきほどみていただいた埴輪列より、さらに削平を受けていますが、本来は密に並んでいたと想定されます。埴輪より外には第2段斜面の葺石がみられます。現状から推測すると平坦面の幅は4mから5mの間で考えられ、他の平坦面より幅広になっていることが分かります。

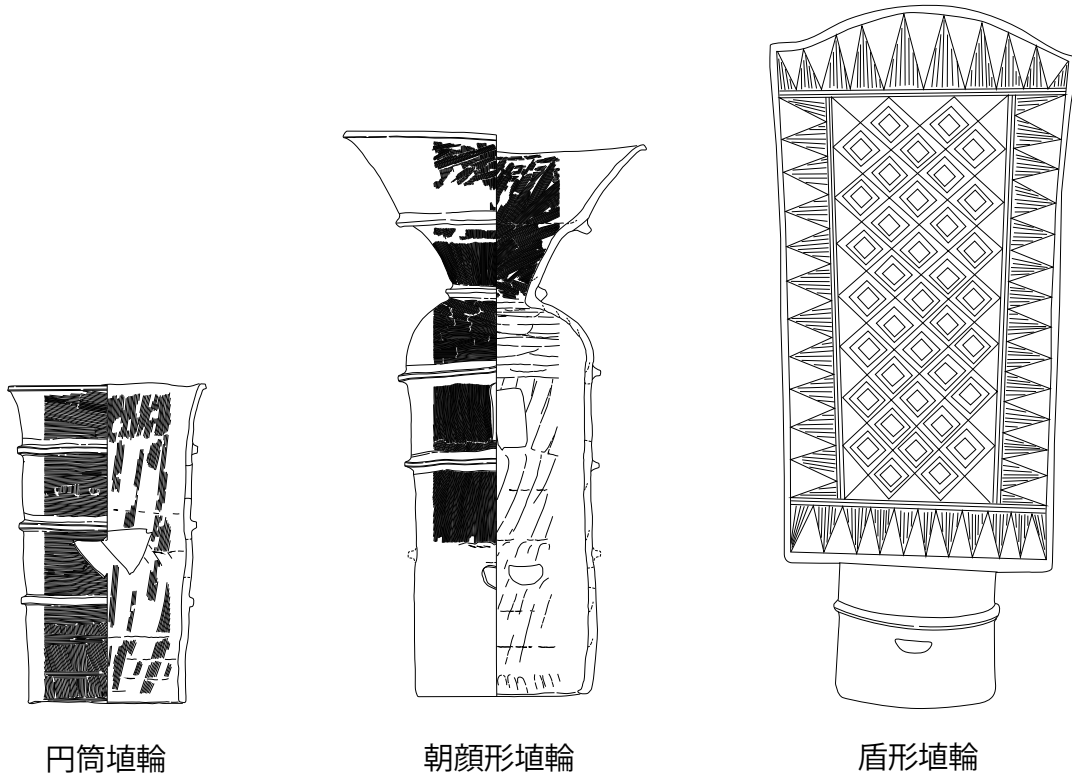
トレンチ 14-2 トレンチ 14 の真ん中の調査区です。場所は第1段平坦面にあたり、横移動すればトレンチ 15-1 と同じ高さになります。ここでは、第2段斜面の葺石が良好に検出され、石材は隙間なくかみあい、斜面に突き刺されています。また調査区内の注目すべきなのが、その葺き方です。葺石は中央に縦方向の目地が通るようにみられ、左右で石の使われた方が変化しています。左手側は横向きにした石材を設置し、一方の右手側は比較的小ぶりの石材が充填されるイメージですが、細かくみると新旧関係が存在することが分かります。こうした作業単位の境界が明確な箇所を検出できれば、葺石を構築した際の工程を復元することにつながります。さらに、葺石の外側には円礫の混じる礫の堆積が別の調査区と同様にみられ、埴輪は1個体残されていますが、隣接する崩落部に近いいためか他は流出しています。平坦面の幅は約3mになります。

トレンチ 14-3 トレンチ 15 で見学いただきましたものと共通し、墳端の構造を調査しました。こちらでは第1段斜面葺石は残りが良く、花崗岩よりも流紋岩が目立っております。こうした使用石材の差も今後の調査で注意される課題となります。また、葺石の外側には円礫混じりの礫の堆積がみられます。一昨年、くびれ部に近い後円部の墳端を調査した際は、段の列石、埴輪列、礫敷きを

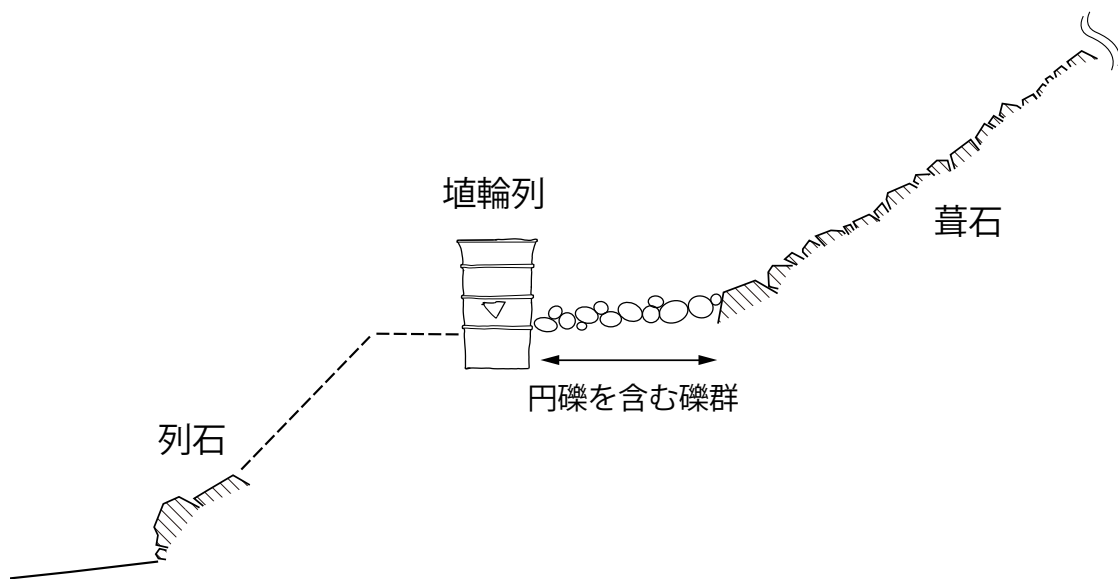
良好な形で検出しましたので、トレンチ 15-2 や 14-3 で、埴輪列が存在していたことは十分想定されます。

まとめ

今年度の発掘調査では、未調査であった後円部の上下2つの平坦面の状況を確認でき、その詳細を明らかにすることができました。過去の調査の成果と照らしあわせると、金蔵山古墳の後円部は各段斜面を葺石が覆う石の山のような姿をもち、埴端、第1段平坦面、第2段平坦面、埴頂それぞれに、埴輪列がめぐっていた可能性が考えられます。こうした葺石と埴輪列は古墳を構成する重要な要素であり、それぞれにおいて埴長が150mを超える古墳の規模に見合う内容です。来年度も継続して後円部側の調査を行う計画です。



〈列を構成する埴輪の例〉



〈埴端の構造模式図〉